

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

神戸のピースセレモニーに参加して

キリスト教と文化研究センター長 神田 健次

昨年の四月より発足した共同研究のプロジェクト「ミナト神戸に

宗教多元主義を探る―八海のシルクロードVの文化と宗教的共生」は、キリスト教平和学研究の新たな展開であり、RCCの主要な共同研究として位置づけられています。ミナト神戸には、古くから神

道の神社や仏教の寺院が存在していましたが、特に近代の開港以降、ミナト神戸は海外交易の重要な拠点として大きく発展する中で、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、ジャイナ教などの多彩な宗教施設が設立されてきました。共同研究では、このようなミナト神戸における宗教の多元的状況の歴史的研究を探りつつ、これまでフィールドワークとミニ・フォーラムを実施してきました。フィールドワークでは、神戸における各宗教の歴史とその共同体の特色、及び地域社会との関わりなどを調査研究してきました。このようなフィールドワークの中で、北野神社を訪れた折、佐藤典久宮司より北野の国際まつりと多様な宗教者による「ピースセレモニー」について話を

うかがう機会があり、今回お招きをいただきました。

北野天満神社は、社伝によると、一八〇年の福原遷都に際して平清盛の命を受けた大納言五条邦綱が、新しい都の鬼門鎮護のために京都の北野天満宮を勧請して社殿を造営し、僧信海に管理させたのがその嚆矢と伝えられています。以後、北野神社の周辺は「北野」と呼ばれるようになり、特に明治になると、神戸に在住した外国人が、居留地返還に伴い、居留地の北にあたる北野町や山本通りに住みはじめ、異人館が立ち並んできた経緯があります。

北野国際まつりは、一九八一年七月二四―二五日に、ユダヤ教のJ・グラック氏の提唱によって北野神社で始まり、その趣旨として、『戦争は地球の病氣』であり、これを治すことができるのは『心の国際交流』である」と宣言されました。それ以降、三〇年以上の取り組みの歴史がありますが、多様な宗教者による共同の平和の祈り「ピースセレモニー」には、これまでユダヤ教、イスラーム、ジャ

イナ教、ヒンズー教、仏教、神道、カトリック教会、ハリストス正教会、プロテスタント教会などの代表が参加してきています。

五月三日に北野神社で開催された「第三一回北野国際まつり二〇一一」における「ピースセレモニー」は、世界の平和を共に祈ると同時に、特に三月十一日に東日本を襲った大地震と津波による犠牲者への哀悼と被災地域の復興を共同で祈願する時として開催されました。わけても、一六年前の阪神淡路大震災の経験から、今回の東日本の大震災は、特別の思いで心に刻まれました。

「ピースセレモニー」には、ヒンズー教、神道、神戸バプテスト教会、カトリック神戸中央教会、神戸平和研究所、日本イエス・キリスト教団イエスの泉教会、そしてRCCなどからの参加がありました。最初に、実行委員長のラニー・チャイナニー氏の挨拶の後、それぞれの立場を代表して祈りが捧げられました。RCCからは、筆者がキリスト教の立場から世界の平和と東日本大震災の犠牲者と復興のために、またRCC研究員のオムリ・ブージッド氏がイスラームの立場から同様の祈りを捧げました。また、その後もたれた復興祈願ステージでは、神戸華僑総会の華芸民間舞踏隊、南インドの古

典舞踊、インドネシアのバリ舞踊、アフリカ太鼓などの舞踊と楽器演奏が行われ、「心の国際交流」という豊かな時が共に分かち合われました。

平和や災害復興という具体的な課題のために、多様な宗教者が共同の祈りをささげる集いは、二一世紀を迎えて特に世界的に重要な課題となつてきています。三〇年以上前から神戸で開催されている「ピースセレモニー」に、RCCのプロジェクトチームが共に参加し、世界の平和と東日本の震災復興のために他の宗教者と共同の祈りを捧げることができたことは、共同研究に新たな視野が与えられたと言えます。



ミニフォーラム (四月二十八日)

チュニジアとジャスミン革命—その発端、現状と影響—

RCC 研究員 オムリ ブージッド

二〇一〇年から二〇一一年にかけて、エジプト、リビア、その他の中東地域、そして中国にまで、国民が民主化を求めるデモの波が飛び火し、「民主化のドミノ倒し」が起こりました。その発端となった「ジャスミン革命」と呼ばれるチュニジアの革命、政変の実態は何だったのか。また、アラブやイスラームではその革命をどのように評価しているのかなどについて考えていきたいと思います。

■チュニジアの歴史的背景

チュニジアは、地中海をはさんで、北アフリカの一番北東にあり、イタリヤの真下に位置しています。チュニジアのアイデンティティは、アラブの一員であるとともに、カルタゴの国という意識があります。紀元前八〇〇年頃、フェニキヤ人によって古代カルタゴが現在のチュニジアの地に建国されましたが、紀元前三世紀頃には、新興国ローマと三回にわたって死闘を繰り広げ、ローマに敗れ、ローマ帝国領となります。ローマ帝国の東西分裂によりビザンチン帝国領となり、七世紀にはイスラームの勢

力にのまれ、数々のイスラーム王朝が入れ替わったのちに、一六世紀末、オスマン帝国の支配を受けます。

一九世紀中頃、チュニジアは西欧化路線をとり、近代化政策を推し進めてきました。そして同時に一九世紀初頭からヨーロッパでは帝国主義が台頭、植民地政策が始まり、隣国のアルジェリアがフランスの植民地となり、一八八一年、ついにチュニジアはフランスの保護領となります。その後、一九〇七年、フランス支配からの独立を目指す青年チュニジア党が結成され、一九二〇年ドウストゥール党に発展します。今回の革命の矛先となった政権与党である RCD (立憲民主連合) の基盤となった政府です。その後フランスの植民地支配に対する反発運動が強まっていき、後に初代大統領となるハビブ・ブルギバが一九三一年新ドウストゥール党を結成、チュニジアの独立をフランスに要求します。独立運動の末、一九五六年に王国としてチュニジアが独立、一九五七年チュニジア共和国となります。ブルギバは、

イスラーム法を廃止し、憲法を制定、徹底した世俗政策を推し進めました。

■第二代大統領 ベン・アリ

続いて、第二代大統領ベン・ア

リの時代にはいりません。このベン・アリは、急進的な世俗主義ではなく、個人の選択に任せた穏やかな世俗主義を選びました。そしてキリスト教会やユダヤ教会に対しても寛容な政策をとるとともに、イスラームに対してもモスクに行ったり、女性のベールやラマダンをするなどとは、個人の自由には任されるようになりました。

しかし、アルジェリアで原理主義が活発になったことから、ベン・アリは原理主義に対しては厳しく弾圧するようになり、さらに自分への反対勢力も弾圧するようになっていきました。彼は再選を繰り返す中で、権力を自分に集中させ、不正な富を蓄えていきました。特に不正を働いたのは、ベン・アリの妻ライラと彼女の実家、トラベルシ一族です。

大統領一族が不正を働き、私腹を肥やす一方、民衆は貧困と不正に苦しめられておりました。例えば十分な能力があっても自らが希望する職業に就くことが出来ないといった状況や、それとは逆に、能力とは無関係に、コネや高額な賄賂によって不正に就職先を得る

といった状況が存在したのです。こうした、国民、特に若い世代の人たちの不満が鬱屈した状況の中に、今回の事件の発端があったと考えられます。

■ジャスミン革命の発端と経過

ジャスミン革命の発端は、チュニジア内陸の最も貧しい地域の一つであるシディ・ブージッドで起こった一つの出来事でした。ムハンマド・ブアジージュという二七歳の青年が、道端で野菜を売っていました。二〇一〇年一月一七日に、女性警官が道端で野菜を売る許可がないとして、彼から野菜を売るための荷車や商売道具一式を没収したため、ブアジージュは返却を求めて警察省を訪れ抗議しました。しかし、女性警官は賄賂を要求し、賄賂を拒否したブアジージュに暴力をふるったのです。ブアジージュは怒りと絶望で、その日の夕方焼身自殺をはかってしまっています。この出来事を知った民衆によって、その日のうちにシディ・ブージッドでデモが起こり、次の日には、隣の町カスリーヌでデモが起こり、チュニジア各地にすごい勢いでデモが広がっていきました。

これらのことが、フェイスブックやツイッターなどの投稿、特に動画や画像の投稿を通して、瞬時にひろがり、大きな動きに発展していったのです。ベン・アリはこ

のデモを沈静化させようとしたが、事態は全く収まらず、ついには大統領の辞任を求めるデモがチュニジア各地の主要都市に広まり、首都チュニスでも行われました。

一月一四日、ベン・アリは陸軍にデモ隊への発砲を命令しますが、陸軍トップの参謀長がそれを拒否します。実権を失ったベン・アリは、国外に逃亡するしかなく、チュニジアを出国しました。

■チュニジアの現状と今後

ベン・アリは政治にはもう復帰しないこと、またチュニジアに戻る意思もないということをいっているそうです。現在サウジアラビアに亡命中のベン・アリを引き渡すよう要求していますが、きつとサウジアラビアは引き渡さないと断ります。イスラーム法を適用しているサウジには世俗法は適用しないという論法を使ってくるだろうと考えます。

一月一八日にフランスから帰国した人権擁護団体の医師であるマルブズキが、次期大統領選に意欲をよめています。この二月末からチュニジア労働総連合 (UGTT) は旧政権の全閣僚の辞任を要求し、暫定政権はそれを受け入れ、RCD の閣僚を解任しました。三月四日には新しい組閣が行われ、公平な選挙が行われるよ

うにするための準備委員会によって選挙規則を作成し、七月二四日に、憲法制定議会委員の選挙が行われることが決まっています。

現在、秘密警察は解散し、RCDは法的に解体しました。何とか大統領選にむけて、一歩ずつ動いているようです。しかしながら、警察が弱体化することによって、各地で暴動が起こっており、秩序がなくなつたチュニジアにどのような新しい秩序を作っていくかが、今後の課題でもあります。

また、アル・ナハダのようなイスラーム政党が台頭することが、アメリカを始め欧米では心配されているところです。アメリカにとって、原理主義者だけでなくイスラミストまでを弾圧したベン・アリ政権は非常に好都合なものでした。しかし私は急進的なイスラミスト政党が新政権の中心になることはないと考えています。なぜなら今までの反政府の運動はイスラーム系の政府によるものがほとんどでした。イランを始めアルジェリア、パレスチナなどがそうです。イランの大統領は今回のチュニジアの革命を「イスラーム革命」と位置づけましたが、大変な見当違いです。ジャスミン革命は、全く宗教にかかわりのない革命でした。

■ジャスミン革命の評価

ドバイにある有名なアラブ政策



研究センター長のパレスチナ人バシヤラ・アズミは、三年前に出版した本の中で、チュニジアの革命を予見していました。彼は、チュニジアにはすでに民主化の準備が整っていた、と言っています。今回の革命をフランスの命名による「ジャスミン革命」ではなく、「パンと尊厳の革命」と呼び、輝かしい市民革命だと讃えています。

次にチュニジア人弁護士で、人権活動家であるタビープは、チュニジアの若者の識字率の高さが革命を成功に導いたと評価しています。確かに、フェイスブックやツイッターなどを使いこなすには、識字能力が必要です。チュニジア

はブルギバ時代、国家予算の三〇パーセントを教育費につぎ込み、学校建設と教員養成に力を入れ、識字率の向上に取り組みました。その高等教育を受けた層からこの革命が始まりました。高等教育を受けても、よい仕事に就けないというジレンマと、一方でコネや賄賂で豪勢な生活をしている者もいるという不公平感が、不満として原動力となつたのだと思います。

チュニジアでは、バシヤラの指摘するように、「ジャスミン革命」ではなく、「パンと尊厳の革命」と呼ばれています。生きるための基本的な生活の権利と尊厳を取り戻したいという思いが込められているのでしよう。またフェイスブック利用者の七五パーセントが一八歳から三四歳の若者であるというように、若い層が中心となつた革命でした。

革命の発端となつた女性警官がブアジージュを殴り、ブアジージュに言った言葉「Degege」（フランス語で「出ていけ」）が、革命の合言葉になりました。デモの中で、ベン・アリに出ていけと書いたプラカードを持って合唱しました。普段はフランス語を使わないエジプトにもこれは広がり、「Degege」と書いたプラカードを掲げて、ムバラクに退陣をせよりました。また、他のアラブ諸国のフェイスブックでも、自分のプロフィールの写真

にチュニジアのデモの写真やチュニジア国旗を使用する人も多くいました。インターネットを通じた共感がアラブ諸国の若者をこれほどまでに連帯させたと言えるのではないかと思います。

■他のアラブ諸国への影響

ジャスミン革命の、他のアラブ諸国への影響は一口では言えないほど複雑です。どの国にもそれぞれの政治体制の違いがあり、社会や国民の状況が多様だからです。また、それぞれの影響については様々な見解があり、私の見方もその一例として聞いていただけると幸いです。

まずチュニジアと同じような過程をたどつたエジプトでは、今回のチュニジアの革命によって市民が勇気づけられ、ムバラクを退陣させることができました。しかし、まだ軍は大きな力を持ち、暫定政権はストライキを禁止する法案を成立させたため、本当の意味での民主化になるのかという疑問が残ります。エジプトもチュニジアと同様、いやチュニジア以上にアメリカ寄りの政策をとり、中東和平の鍵を握る国であったため、アメリカとイスラエルにとっては大きな打撃であつたようです。

リビアでもカダフィ打倒を求めた動きが、二月一七日に始まりましたが、リビアの場合は民主化を

求めてというより、部族間の利害争いの相が含まれているようです。チュニジアやエジプトとはまた違って、どの部族が政権を握るかが関心事になっています。

イエメンやアルジェリアでも大統領に退陣を求めるデモが続いていますが、ここでは実際、現政権が崩壊することによってアルカイダ系のイスラーム原理主義が活発になる危険性が非常に高いと考えられています。ヨルダンでも国会解散、民主的な選挙の実施、そしてイスラエルとの和平の撤回などの要求を掲げてデモが行われています。王家の浪費への批判が起きています。そしてバーレーンでは低賃金で働く外国人労働者の抗議行動が起こっており、今はチュニジアに続くエジプトの革命で、自分たちにもできるのではないかとという高揚感が伝染している状態です。国によっては権力で抑えられてしまふところもあるでしょう。しかしながら、今回は収まっても、必ずまた湧き上がってくるでしょう。それには、チュニジアの連立政権が成立するかどうかにかかっていると、思います。

チュニジアはもう後戻りするとは思いません。本当に国民が納得した大統領を選び、本当の民主化に向けて動き出したとき、チュニジアは他のアラブ諸国の模範になることができると思います。

講演会『関西学院と震災ボランティアについて』

キリスト教と文化研究センター長 神田 健次

関西学院の建学の精神やMastery for Service が語られるとき、一六年前の阪神・淡路大震災における救援ボランティアの働きが思い起こされます。今回の東日本大震災でも震災ボランティアの働きについて大きな関心が寄せられている中、もう一度震災ボランティアのありかたを共に考えたいという趣旨で、五月二〇日（金）、RCCと学院史編纂室との共催で講演会「関西学院と震災ボランティア―阪神・淡路大震災の経験から―」が



野口啓示氏

開催されました。講師として、野口啓示氏（社会福祉法人「神戸少年の町」施設長）と岡本仁宏氏（法学部教授）をお招きし、約六〇名の参加者がありました。

最初に野口啓示氏が、当時の救援ボランティアセンターの学生代表の立場から発題されました。まず下宿で被災された経験から、ボランティア活動に参加するに至った動機について語られました。避難所に昼夜三交替制でボランティア

アを派遣する救援ボランティアセンターの役割については、初期の段階は水や食料などの物資の運搬といったライフライン確保の取り組み、そして次第に避難所において心のケアのボランティアが必要とされてきたニーズの変化について語られ、現場のニーズをその都度把握することの大切さを思わせられました。救援ボランティアセンターは、二ヶ月後にヒューマンサービスセンターに改組されましたが、当時の諸状況を考慮して適切な判断であったと述べられました。

続いて岡本仁宏氏が、当時の救援ボランティア委員会のメンバーの立場から発題されました。まずボランティア活動への参与の要因として、ご自身の被災経験について触れられた後、救援ボランティア委員会が発足した経緯と活動内容について語られました。活動内容として、救援ボランティアセンターの他に、これも学生が代表を務めた物資の仕分け・配送を担う救援物資センターの働きをあげられました。また被災者のニーズがメンタルケアに変化してきた段階で、多彩な特別企画が実施され、子どもたちの千刈一泊ツアー、高齢者や障がい者の日帰りお風呂ツアー、りんご娘などを紹介されました。さらに、他大学からのボランティア受け入れと派遣や他のボ

ランティア組織との協力にも言及されました。
東日本大震災との関係で、直接ボランティア活動に携わるにせよ、遠

RCC 研究プロジェクト

「自然の問題と聖典」について

キリスト教と文化研究センター副長 樋口 進

この研究プロジェクトは、二〇一一年より始められた。

最近、自然界の異常な現象が頻発している。今年の三月一日に起こった東日本大震災のような巨大地震が地球のいろいろなところで頻発し、甚大な被害が出ている。また、地球温暖化の影響が、気温が上昇し、酷暑やゲリラ豪雨、洪水、また一方では干ばつが起こったり、氷河が細ったり、湖が消滅したり、砂漠化が増大したりしている。そして、北極の水が解けて太平洋の島が水没する危惧も叫ばれている。また、動植物の多くの種が絶滅の危機にあるという（生物多様性の問題）。まさに、パウロが言ったように自然界全体が「共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」（ローマ八・二二）現状である。

また、科学技術の発達によって、人間や動物の命を操作することが可能になり、いろいろな議論が起こっている（生命倫理の問題）。また、ベトナムにあつて動物の命や権利に関する問題も議論されている。

人間と自然との関係はどうあるべきであろうか。人間が自分たちの欲を満たすために自然を乱開発

方から可能な支援をするにせよ、被災者のニーズが変化してゆく状況をその都度認識する必要性をあらためて確認する機会となりました。

したり、荒廃させたりしていることが、自然界の異常な現象の原因ではなからうか。人間が自然とどのように関わりあうかは、現在の喫緊の問題である。宗教がこの自然の問題にどう答えるかは、重要な課題であると考える。

聖典では、この自然をどのようにとらえ、またどのように解釈してきたか、またどのような課題があるであろうか。

この研究プロジェクトでは、人間の自然へのより良い関わりについて、聖典の解釈を通して提言することを目指す。キリスト教の聖典だけでなく、他宗教の聖典の解釈を通して提言もしていただく。

各学期に少なくとも二名ずつ発

編集後記



東日本大震災は、被災地に大きな被害を与えただけでなく、何をどのように考えるのか、今後どのような社会を築いていくのかという大きな問いを与えました。その影響はドイツのエネルギー政策も変えました。同様に、チュニジ

表し、時に外部より講師を招いて、フォーラムや講演会を行う。成果は、本として出版する。

研究員は、樋口進 RCC 教授（コーディネーター）、土井健司神学部教授、嶺重淑人間福祉学部准教授、水野隆一神学部教授、平林孝裕国際学部教授、奥野卓司社会学部教授、近藤剛神戸国際大学准教授である。

今年度の予定は以下である。

第一回研究会：二〇一一年五月三十一日（火）一七時―一八時三〇分「旧約聖書における自然災害」樋口進 RCC 教授。第二回研究会（ミニフォーラム）：二〇一一年六月三〇日（木）一七時―一八時三〇分「わたしたちのいのちの源に目をむける―名古屋学院大学での実験動物感謝記念礼拝の取り組み」大宮有博名古屋学院大学准教授。第三回研究会：二〇一一年一〇月一七日（月）一七時―一八時三〇分「神学の緑化」近藤剛神戸国際大学准教授。第四回研究会：二〇一一年一月一日（日）は未定。一七時―一八時三〇分「大震災と原発事故における動物愛護の文化的背景」奥野卓司社会学部教授。

アのジャスミン革命もわたしたちの社会のあり方、未来をどう切り開いていくのかを問う出来事です。そして、時代が大きな変革を迎えようとしている兆しもあり、それが国境を越えわたしたちに迫ってきています。まさにグローバルな社会のただ中にわたしたちはい

ることを実感します。
（主任研究員・中道 基夫）